

島崎祐司君（享年三十歳）

遺文・遺歌集

付・追悼歌

明治天皇御製

をりにふれたる

若きよにおもひさだめしまごころは年をふれどもまよはざりけり

誠

疾き遅きたがひはあれどつらぬかぬことなきものはまことなりけり

友

もろともにたすけかはしてむつびあふ友ぞ世にたつ力なるべき

述懐

なかばにてやすらふことのなくもがなまなびの道のわけがたしとて

ここに謹載させていただいた明治天皇御製は生前故人が、社会人として第一歩を踏み出すにあたって日々の心の糧としていかうと讃仰の対象としてゐたものです（前三首）。

なほ、最後の一首は故人が学生時代から参画し活躍してゐた東工大歴生会の文集「学びの道」の題名の起源とさせていただいた御製です。



島崎 祐 司 君 遺 影

前略

元々か！

たまには便り書き！

東京の秋合宿はよかった！

松陰も読んだ！

草々

目次

遺文・遺歌	1
正岡子規の歌と歌論ハ「学びの道」第五集V	3
正岡子規の歌についてハ久留米学生リーダー合宿問題提起文V	8
感想ハ久留米合宿記録集V	12
感想ハ「学びの道」第六集V	14
小田実の天皇論ハ「国の息吹き」第三十一号V	16
戦艦大和ノ最期ハ「学びの道」第七集V	26
拝啓ハ歴生会新入生勧誘原稿依頼状V	34
歴史を蘇らせる力ハ東工大歴生会勧誘パンフレットV	36
「講孟餘話」輪読感想文ハ「学びの道」資料集V	38
小田実の天皇論ハ「国の息吹き」第四十四号V	39
私達が学ぶべき学問とはなにかハ「国の息吹き」第六十号V	43
合宿勧誘をふりかえってハ「国の息吹き」第七十八号V	49

「合宿教室感想文集」より

遺歌

書簡

追悼歌

略歴

あとがき

.....

.....

.....

.....

.....

.....

遺
文·遺
歌

正岡子規の歌と歌論

（「学びの道」第五集（東工大歴生会発行）昭和四十九年十二月十五日）より
東工大三年・二十一才

一、歌と真心について

人間の心とは実に不思議である。微分や積分、フーリエ級数やラプラス変換も、一人の人間の心を解折できぬのである。毎日毎日には悲しい事、苦しい事と色々ある。それは人には心があるからである。そして時には生きている瞬間瞬間の自分の心を何とか表わしたい、或は人に伝えたいと思う時がある。そうした時に絵が生れ、曲が生れ、詩が生れる。かくして歌も生れたのであろう。歌が自然に生れる時、歌をどうしても作りたいと思った時、我々の心はいかに緊張し生き生きとしてゐることだろうか。考えてみればそこにこそ一人の人間の心の自由と平和があるのでないだろうか。ここで私は「短歌のあゆみ」（国文研叢書13）の次の文章を上げたい。

「このようにして、歌は生きることの意味を味わう心のはたらきであるから、生の意味を追求する心持のない場合には、ろくな歌はできない。自分の本心をいつわっても歌はできない。ただしく強く生きようという願いからこそまことの歌が生れるのです。そうしてこの人生とは、日常実際の生活に他ならないから、実生活の苦悶を回避すると、歌は、いわば表現の材料を失ってしまつて、単なる形骸になってしまう。力ある歌は、人生の逃避からは生れない。（古今集、新古今集に比べて万葉集を推すのはこのためです）しかし、また、実生活だけあって歌がないなら、実生活の経験

の意味は感得されないうちになって、人生はむなしなものとなってしまふでしょう。「歌は実人生の表現」たるべきものです。」

防人が妻や子を歌った歌や、南の空に飛立つ特攻隊員が、母や兄弟を歌った歌に心ひかれるのもそうした人生への態度から生れた歌だからであろう。かくして歌は「真心の気持ち」と結びつくのである。今はなくなった人であるが、年にしてみれば、私たちと同じ世代を大東亜戦争の最中に過された和田山儀平氏の歌に心ひかれるのも、歌に何ら暗い悲壮感のみじんも感じられず友や家族への思いを心から歌っているからであろう。彼の心は自由であり平和である。

二、子規の歌について

さて、今回の合宿では「短歌のすすめ」（国文研叢書12）を基にして正岡子規の歌と歌論について発表させていただいた。大切な時間の一部を与えられ、それに答える発表ができなかったのは反省している。歌論については「歌よみに与ふる書」を取り上げたが難しく結局「短歌のすすめ」にそって説明することになった。全体を通じて二つの事柄が私個人の問題として残った。一つは、歌と「真心」ということであつた。それがどうもピンとこないでいたが、今日はそれに答える意味で先のように書かせてもらった。もう一つは子規自身が古今集に代表される日本の美意識をどう考えていたのであろうかということである。

最後に「墨汁一滴」の中から子規の歌をあげたい。何年もの間、病の床についている子規を思う

とき、この連作の歌は誰も心の心に残るであろう。

しひて筆をとりて

佐保神の別れかなしも来む春にふたたび逢はむわれならなくに
いちはずの花咲きいでて我目には今年ばかりの春ゆかんとす
病む我をなぐさめがほに開きたる牡丹の花を見れば悲しも
世の中はつねなきものと我愛づる山吹の花ちりにけるかも
別れゆく春のかたみと藤波の花の長ふさ絵にかけるかも
夕顔の棚つくらんと思へども秋まちがてぬ我いのちかも
くれなるの薔薇ふふみぬ我病いやまさるべき時のしるしに
薩摩下駄足にとりはき杖つきて萩の芽つみし昔おもほゆ
若松の芽だちの緑長き日を夕かたまけて熱いでにけり
いたづきの癒ゆる日知らにさ庭べに秋草花の種を蒔かしむ

感想

今回の合宿は心知れたる内輪同志ということもあり、さらに日程もさほど詰っておらずのんびりとした感があった。もっとも個人個人の発表は各自各自の問題点が感じられ考えさせられる所があった。更に一層自らの提出した問題を深めて行く努力が行われ来春の合宿で発表されんことを希望したい。自分もそのために努力したい。更に合宿当日の朝奥富さんに長女が誕生されたことは合宿に参加した者として何よりの喜びであった。とりわけ氏より送られし歌は今回歴生会で詠みし今上天皇の

国の春と今こそはなれ霜こほる冬にたへこし民のちからに

とともにとても印象的な歌であった。

床に伏し今ひとときを待つ妻のあかみおびたる顔ぞいとしき

中でもこの歌の「いとしい」という語のなんと心うつ調べであったことか。

先輩より赤子の生まれしの知らせを聞きて

先輩ゆ送りこられし短歌をば友らとともに聞くこの夕べ

友どちが詠み上げたりし歌声はピーンとはりて空にひびきぬ

歌聞けば今日一日のときめきと不安が心に伝わりて来し

霜月の新嘗祭に生れたる赤子よどうか健やかであれ

先輩の発表せられしその声もなか聞えぬ親子思ひて

一夜過ぎ今再び歌詠めば「いとし」の文字が心に残れり

正岡子規の歌について

(春期学生リーダー合宿問題提起文)
昭和五十年三月 一 久留米

東工大三年
二十一才

近代作家の中で、近代人と個の問題を一早くとらえたのに夏目漱石がいる。そして現代の我々日本人は個に固執して個我と個我との絶えまぬ衝突に明け暮れる時代に生きている。そしてこれは我々日本人が日本史上まったく経験したことのない時代でもある。それが近代社会と言うべきものかもしれない。夏目漱石は「近代社会と個」の問題をすでに予告し(それは、彼自身の経験した問題でもあったのだが……)一連の小説を書いたが故に、今なお多くの日本人に愛読され続けているのであろう。それでは漱石が提出した問題とは一体何であったのであろうか。それは近代社会という異常な迄に科学文明の発達した、それでいて、一人一人の日本人が個としての人間にまで還元されて、個としての道徳律と個我の内部衝突に悩み続けている社会の鋭い指摘であったのである。漱石はそうした社会における人間の悩みを追求し続けたのである……。

漱石の友人である正岡子規は歌の世界で漱石の提出したのと同じの問題を考えていたように思えてならない……。

子規の歌の心は「しひて筆をとりて」の連作歌の中にはっきり表わされている。それは心と自然が同一の世界の中に融合しているのである。近代人の固執する個のかけらすらない。心と自然が融合することで、永遠の生命を取り戻しているのである。有りの儘の心で詠むことから子規は出発している

のである。そうした姿勢は社会の出来事に対しても子規に敏感な心で歌を作らせている。例えばある親孝行な青年に対して子規は素直な心で詠みたたえる歌を作っている。自らの個の殻を取払って自然や人との友情、人の思いの中に融合しようとする時こそ、我々は近代における自己の個だけの世界から解放されるのである。ここにおいて歌を詠む心は人生における生きる姿勢と結びつくのである。そうした事を私はつくづく最近思うのである。ここで自分の気持ちの紹介のため、失礼ながら自分の歌を引用する。

レポートを書き終えて室の窓を明けし時の歌

街灯のあわき光で電線の水玉白く連なりてをり

自動車の通り過ぎればあたりには静けさ戻り虫の音聞ゆ

虫の音を耳を澄して聞きをれば今夜の涼しさ肌に感ぜり

この歌を今読み直す時、自分の歌の心があまりに冷たいのに気づく。虫の音の中にさえ、自己の心の融け込む世界があるのにそれが発見できなかったのである。そして自分の気持ち——苦勞したレポートを書き終えてはっとすれば今まで忘れていたかのように虫の音が聞え出す。自己の世界から、ふと自然に目をやれば知らず知らずのうちに秋は深まっていた。そうした一つの発見に気づく——そんな

な気持ちに詠めなかつたのである。

歌と芸術について、いろいろな議論があることかと思ひます。「人生の為の芸術か」「芸術の為の人生か」など……。しかし、こうした議論の中で我々は、芸術とは何なのかと言う根本的問題を忘れていないだろうか。ここで、漱石の草枕の冒頭の有名な文章を書くことにしよう。

「……越すことのならぬ世が住みにくければ、住みにくい所をどれほどかくつらげて、束の間の命を束の間でも住みよくせねばならぬ。ここに詩人という天職ができてここに画家という使命が降る。あらゆる芸術の士は人の世をのどかにし、人の心を豊かにするが故に尊い。住みにくき世から、住みにくき煩いを引き抜いてありがたい世界をまのあたりに写すのが詩であり画である。あるは、音楽と彫刻である。こまかにいえば写さないでもよい。ただ、まのあたりに見れば、そこに詩も生き、歌もわく……」

漱石は右の文章で「あらゆる芸術の士は、人の世をのどかにし、人の心を豊かにするが故に尊い」と言っているのである。かくして芸術は、我々に感動を与えてくれる。そうした時、我々は自己の個の世界から解放され、ほんの束の間であれ、永遠の時間と空間という静寂の中にいる自己を発見する。そしていい歌にめぐりあえた時も我々の心は、永遠の空間と時間の世界を発見する。結局、個の世界の中だけで歌をもて遊ぶことから、永遠の空間と時間を創造できないのであるし、たった一人の人でさえ、感動させる個と個の融合した世界を創造できないのである。

以上、正岡子規という人間の成した仕事を現代に於て考える時、彼が示してくれた歌詠みの心は、近代日本人が、これから再発見し歩み行かねばならぬだろう方向を示してくれているように思えて来る。それは、まさしく漱石が投げかけ、悩み続けた「近代人と個」の問題でもあったのである。

感想

(昭和五十年三月春季久留米合宿記録集より)

東工大三年
二十一才

大学というぬるま湯につかっただけで三年、いつしか心の中にもぬるま湯が浸透し、気が付いたときにはぬるま湯でいっぱいになっていた。

感激することのない生活とでも言ったらよいのだろうか。もちろん専門の勉強はやるにはやるのだが、我を忘れてまで真剣にやっていたのではなかった。そんな感激のない心の冷えた生活の中でいたい自らが見失っていたのは何であったか。それは信念であり情熱であったろう。しかし、いくら信念信念と繰り返していても仕方のないもので、それは、はっきりした基——自らにとってかけがえないもの——に裏付けされていなければならない。しかし、基の前で一人うづくまり、ぐずぐずしているのが常であった。先はわからない。しかし、今これほど思ったことにとび込む勇氣、これこそ必要だ。松陰の本も読みたくなった。

それから一つ、感じたことは「言葉は生きている」ということであった。二人で話すとき自分の言った言葉は私とまったく同質の人間を空間に生み出し、それが相手の心の中に飛び込んで行く。私の胸の中以上でも以下でもない。自分が言葉にとまどったときは、まさしく心もとまどい、まよっているのだ。言葉だけでなく文章だってそうだ。そして和歌もそうであった。ダイヤのごとくかたく、炎

のように燃えて、そして氷のように冷静な言葉が結晶化したとき、和歌はすばらしくなる。和歌は気安く読みはじめたのだが、今日ほど和歌は恐しいものだと思ったことはない。

感想

（「学びの道」第六集（東工大歴生会発行、昭和五十年十二月）より）
東工大四年
二十二才

どうも最近、肩ひじをはって語ったり、書いたりするのがきらいで、気楽な気持ちで書きつづってみる。感想文だからこれくらいでよかろうと勝手に決めこんで最近の自分の気持ち、合宿での感想をここで記しておきたい。ところで最近感じることは歌の好みが変わってきたということだ。例えば今朝の明治天皇の御製だが、以前はどうも教訓くさくてきらいであった。ところが最近は心に受けとめられるようになった。ただ一方自分が歌を作るとなるとそこに鏡のように自分の心が写し出されていやになることもある。歌は実に恐ろしいものであるのだ。さて今回の合宿での感想にうつろう。ノルマに追われる生活から離れて、久しぶりにはりつめた気持ちだ。良かったのは天皇の御製発表であった。明治・大正・昭和三代の天皇の御気持ちに少しもおごった所がなく、すこやかなお気持ちで天皇の任をはたされているなど思っている。確かに第二次大戦中及び今日まで天皇制云々の議論はあっても、一番の問題の本質は日本人一人一人が（自分自身）どう天皇を受けとめてきたかにあるのだろう。本当に問われねばならぬのはその問題である。

— 朝の海 —

灰色に低くたれこむ雲なれど海の彼方は明るくなりけり
空の色海面にうつり暗けれど打ち寄す波の力強けり
海原を眺めてをれば渾心の力を波に託すか海はも

— 友 達 —

友達に語らひゆかむと欲すればまづ己が身の振り返らるる

— 先 輩 —

忙がしくもかけつけたたまふ先輩の学ぶ姿にはげまさらるる
大御歌を詠む先輩の歌の調はいつしか我の心に溶けこむ

小田実の天皇論（「国の息吹き」第三十一号・昭和五十一年十月）

東工大修士課程
二十三才

著書及び著者紹介

本書は、九編の論文からなりすでに雑誌「思想の科学」及び「終末から」にすべて発表されたものである。目次は、具体的には次のようになってい

- 一、見えない人間——はじめに——
 - 二、ピラミッドと天皇
 - 三、天皇と声
 - 四、「象徴」という人間
 - 五、「現人神」と「臣のいのち」
 - 六、国家的祈りと個人的祈り
 - 七、二つの天皇観——「顕教的天皇」と「密教的天皇」
 - 八、「人間宣言」の意味
 - 九、「企業ぐるみの自分」・「企業ぐるみの日本」・「企業ぐるみの天皇」
- 今回は、この内五編を取りあげた。

著者につきましては、昭和七年大阪に生まれ、昭和三十二年、東京大学文学部卒業。米ハーバード

大学に学ぶ。小説、評論を書く一方、ベ平連（ベトナムに平和を！ 市民連合）の代表として活動をはじめに

小田実氏の天皇観は、はっきり言って批判するにとるにたらない価値のないものと言える。しかし、現実には小田実氏の本が、若い人達の間で読まれ、大きな影響力を与えている点を考えてみれば、どうしても何らかの形で取り上げざるをえない。そこで、今回は、目次にそって氏の天皇観を紹介してゆくとともに、一体、問題とすべきは何なのかという本質的問題を考えてゆくことにしよう。そうすること、小田実氏の物の考え方——国家観・歴史観・人生観——が浮き彫りにされてゆくことだろう。目次を追って

一、「見えない人間——はじめに——」と題して

○ 氏の問題提起の理由

「私が天皇のことを考えだした一つの理由は、子供のときの自分が判らないからだった。ほかのことについてなら、だいたいにおいて、現在の自分の考え方、感じ方から過去へ延長線を引けば、なんとか判る。しかし、そのやり方では判らないことが一つあって、それが天皇であった。天皇について、自分が何を考えていたのか、感じていたのか、かにもく見当がつかない。」

○ 問題提起への氏の取り組み方

「私の歴史観を見ると、私の場合、一九四五年八月十五日で新しい日本が始まったという意識、

というより実感があまりにも強すぎたのだろう。それ以前の歴史は無になったような感覚をもったのかもしれない。というより、敗戦〓新日本の誕生は、私にとって、国家とか民族とかのワク組みをこえた思考の誕生ということであった。敗戦とその後焼跡の状況が私の精神生活にもたらした最大のもの、今から考えてみると、どうやらそうした国家・民族のワク組みをこえた思考であったのではないか。……………（省略の意味）…………… 私が焼跡と闇市をうろつきながら学びとったのは、「人間は人間や」というきわめて判りきった事実であり、そこからなんであれすべてを出発させなければウソになりマヤカシになるという信念であり、ついでに言えば、「古今東西、人間万事平等、チヨボチヨボヤ」という哲学であった。さて、こうしたコスモポリテース的、ないしは、ゴタマゼ的人格の形成のあとで、歴史をみればどういうことになるか。…………… 私はどうやら、八月十五日以前の日本の歴史を人類史的にとらえていたのだろう。」

○ 再び問題提起の理由

「こういう視点をいったん形成してしまうと、判らなくなったのは八月十五日以前の自分である。例えば、八月十五日以前、私がこの「見えない人間」である天皇という存在について何をどんなふうと考えていたのか。……………」

以上、氏の論の要点を紹介した。氏の天皇への取り組み方は、このように左翼陣営の人々に見られるようなイデオロギーに基づくものでもないし、また我々の感性そのものに矢をなげかけるような

高いレベルでの天皇制批判でもない。はっきり言って、なぜ氏が天皇制批判をするにいたったか、その根拠は曖昧模糊としたものである。なるほど氏のように、国家・民族そして民族の脈々とした歴史の流れを否定する立場に立てば、天皇制批判は当然の結果として生じてくるだろう。しかし、あえて言えば一体そうした否定しがたきものを否定した後、何が残るといえるのだろうか。氏の言う「人間は人間や」の信念・哲学、そして人類・人類史などの言葉が、一人の人間の心を感動させるものとなるのだろうか。

このように、小田実氏の物の考え方そのものに、すでに問題が内在しているように思える。このことは、敗戦とその後の焼跡的状况の中で氏が何を思い、何を感じたかを調べてみなくてはわからない問題といえる。このことは、大切と考えるので、以下氏の四編の論文を基に氏の天皇観を紹介した後、もう一度ふれたいと思う。

二、「ピラミッドと天皇」と題して

『ともかく、日本は特殊であり、日本の歴史に根ざした天皇、天皇制は特殊であり、それ故に、日本の天皇、天皇制は、特殊に日本的である。そうとしか言いようのない言説をたびたび耳にして来たように思う。あれほど、自国のすべてのことがらを外国の事物と比較して「日本はダメだ」という結論を出したがる日本人が、こと天皇と天皇制に関してそうした、習慣を今日まであまりもたないでいるのは、天皇、天皇制をあまりにも特殊に日本的であるとする、つまり、特殊にすぐれたものである

とする前提を政治が強く打ち立てすぎたからであるにちがいない。」

以上、要点らしき所を紹介した。一つ感じたのは、天皇制という言葉のむずかしさである。というのは、制という言葉が、往々にして制度という言葉を連想せしめるからである。天皇制とは、天皇制度という意味ではもちろんなく、その本質は、歴代の天皇が脈々としてこの日本の地に、脈々と受け継がれて来た事実にはかならないと私は考える。しかし、小田実氏の論は、「政治が強く打ち立てた」という表現でわかるように、制度という意味を強くとっている。ここにおいて、氏の論の特徴がわかる。

三、「天皇の声」と題して

以下は、一九四五年八月十五日の玉音放送についての氏の意見の要点である。

「しかし、この事実は、私のみのことではなかったのではないか。その時、日本国民の多くが、それまで抽象的存在であった天皇を生ま身の声の存在として実感したのにちがいないのだが、それはふかく考えてみるべきことであろう。たとえば、それによって、民主化された天皇制の神話がその後やすやすと容認されて行ったことについて、天皇の戦争責任の追及があいまいにされてしまったことについて、いや、天皇制の存続それ自体について——私には、あの放送は、戦争の終結のために必要であったというよりは、天皇制それ自体のために必要であったと思われる仕方がないのである。」

河上徹太郎著「戦後の虚実」によれば、八月十五日の御放送の直後、一瞬の静寂が全土をおおっ

たという。それを、氏は、我々民族が嘗て持ちえなかった一瞬の静寂だったという。この一瞬の静寂という言葉は、何と美しい響きを私に与えるのであろうか。それは、まさしく、河上徹太郎氏が自分の素直な気持ちで言葉で表現されているからであろう。言いかえれば、直観の世界の言葉なのである。それに比べ、小田実氏の話は、まったく当日（十月二十三日～二十四日の研究会）先輩方が指適されたように、作り話であり、後からの責任なきこじつけ話にすぎない。

四、「象徴という人間」と題して

以下は、一九四六年一月の元旦の勅語についての氏の意見である。

「こうした、重要な宣言の背後にある無責任性は、私には許しがたいことであるように思える。たとえば、今もし世の中が変わって、天皇の「人間宣言」が否定される時代が来たとしても。その時、ふたたび、あれは天皇が自分でしたことではなく、まわりがわるいのだということになるのは、これはむしろ論理的な帰結だろうが、戦後の天皇、天皇制論議は、どうやらこのところを素通りして来てしまったような気が私にはしてならない。……どんな手続きが必要だったのか。それはまず何よりも「動もすれば焦燥に流れ、失意の淵に沈淪せんとするの傾あり」という状況をそんなふうにして他人事のように述べるのではなく、天皇の側におけるその状況をつくり出した責任者としての責任、いや罪の自覚だったと私は思う。そしてその自覚は、もちろん、「爾等国民」のまえにはっきり表明される必要があった。」

私は、この元旦の勅語は読んでいない。始めに、このことはことわっておく。

氏の論の誤ちとしては、次のようなことが上げられる。

(一)、天皇自ら「人間宣言」などという御言葉を使われていないという事。

(二)、天皇ほど深く責任を心の中で感じている人はいないという事。

(三)、天皇は、よろこびもかなしみも国民と共にして来た方で決して他人事のように言われたのではない事。

(四)、天皇の御気持は、御歌そして毎年八月十五日に、私たち国民に語られている事。

五、「人間宣言」の意味と題して

以下は、この論文の要点らしき所の紹介である。

「戦後、天皇が人間宣言を発したことは、それは文字通りにとれば、すくなくとも、「顕教」的天皇観によるかぎり、天皇制に一つの革命が起こったということだろう。私にも、この事実の重要性がまだよく人々に認識されていないように思える。「革命」である以上、私たちは、天皇、天皇制を考へるとき、それを無条件に過去につなげてしまつて、歴史的・土着的な見地から天皇・天皇制の問題をとらえてしまつてはならないと思う。」

ここで、氏は、「顕教」的天皇観・「密教」的天皇観・「革命」という言葉——左翼用語——を使っている。小田実氏には、このような面がよくみつけられる。

小田実氏の物の考え方について

—— 敗戦とその後の焼跡的状况の中で氏が何を思い、何を感じた ——

この点については、小田実著「難死の思想」を参照した。この本では、「平和をつくる」という章で、次の六編の論文が上げられている。以下、要点の文章を紹介しよう。

(一)、「難死」の思想 (二)、平和の倫理と論理 (三)、人間・ある個人的考察

(四)、「物」と「人間」 (五)、無題の発想 (六)、私自身のなかの平和

一、「難死」の思想より

「あの死をどんなふうにかえることができるのか。たしかなことは、彼らの死がいかなる意味において、「散華」ではなく、天災に出会ったとでも考える他はない。いわば「難死」であった事実、ただそれだけであろう。その「難死」に視点を定めたとき、私にはようやくくさまざまなが見え、逆に「散華」をも理解できる道を見出せたように思える。」

二、平和の倫理と論理より

「空襲は戦争が、「英雄のいさおし」ではなく、一方的な殺戮にすぎないことを私に同時に教えたが、同時に、どのような状況下にあっても、人間は日常性を保持して生きるものであるという認識を私に強いた。たぶん、それまでに私が思い描いていた戦争は、「大東亜共栄圏の理想」と「天皇陛下のために死ぬこと」という二つの理念がなんの媒介なしにじかに結びついた、むしろ描象的な

そして私たちの多くが、その自覚を踏み台として、過去の戦争を眺め、また、戦後の状況に対応したことは言うまでもない。おそらく、被害者体験、そして、その自覚は、戦争と戦後をつなぐ一つの重要な支点として働いていたにちがいない。……被害者体験、その自覚が私たちの思想にもたらした最大の功績は、そこに腰をすえることによって、これまで絶対的強者であり絶対的正義、善であった国家原理に対して正面からむきあう姿勢をあたえたことだと、私は思う。……」

あとがき

小田実氏の天皇観の紹介ということで、読んでいただけたらよいと思います。なぜならば、さほど、小田実氏の本質へくい込めなかったからです。小田実氏について言えば、天皇制議論の前に、何を大切に思い、何を信じている人なのかをつかまなくてはならないと痛感しました。

最後に、研究発表会での先輩方の助言が、今回まとめる上で大変参考になりましたので、明記しておきたいと思います。

戦艦大和ノ最期

（「学びの道」第七集 昭和五十一年十二月） 東工大修士課程
吉田満著（北洋社）を読んで 二十三才

——はじめに——

昨年、東京地区OB研究会で、「小田実の天皇観」について発表させていただいた。その時の結論として、小田実氏の天皇観を問題とする以前に、小田実氏の人生観・歴史観に問題は内在しているとの方向づけが見えて来た。例えば、次のような文章である。

「実際、戦後の出発点、八月十五日体験の底にあるのは、多くの場合、強烈な被害者としての自覚であるにちがいない。体験の記録の筆者の多くが、有名無名をとわずそのことにふれて書いた。そして私たちの多くが、その自覚を踏み台として、過去の戦争を眺め、また、戦後の状況に対応したこと、は言うまでもない。おそらく、被害者体験、そして、その自覚は、戦争と戦後をつなぐ一つの重要な支点として働いていたにちがいない……。被害者体験、その自覚が私たちの思想にもたらした最大の功績は、そこに腰をすえることによって、これまで絶対的強者であり、絶対的正義、善であった国家

原理に対して正面からむきあう姿勢をあたえたことだと、私は思う。」

これは「難死の思想」（文芸春秋）という本の中で「平和の倫理と論理」と題うった中にある文章である。ここに、まさしく戦後文学の一つのパターンがある。それは、まさしく、「大空襲のなかで殺されて行った人々の死——難死」の意味を問いつづけ、その問いかけの上に自らの世界をかたちづくって来た、被害者意識の文学であった。確かに祖国日本の完全敗北とは、そういうことかもしれないが、しかし、それが、あの時代を生きた人々に本当に答えることになるのかとの気持ちが発表後高まっていった。

今回の合宿では、あらためて自らの気持ちを整理し、小田実氏に明確に答える意味で本書を紹介・発表させていただいた。前に読んで参考になると思っていた「初版あとがき」「決定稿に寄せて」を中心に、合宿では発表した。

—— 本書紹介 ——

本書を知ったきっかけは、「続こもんせんす」江藤淳著による。それによれば

「吉田満さんは、学徒出陣の海軍少尉として戦艦大和に乗り組み、沖縄戦の際大和の特攻出撃に加わった。大和が沈没したとき、九死に一生を得て、戦後復員して間もなくほとんど一日でこの作品を書き上げた。大和の出撃から苦闘、沈没、そして生存乗組員の帰郷が抑制された片仮名まじりの文語

体で正確に叙述されている……。作者の吉田満さんは職業作家にはなりませんでした。戦後、東大に復学し、卒業後は日本銀行に入行して、いまでも日銀に勤めておられる……。」

なお、サンケイ夕刊文化欄の記事によると、故吉川英治さんにすすめられるまま一気に書き上げたということである。内容については、以上の通りであり、一読してもらえれば幸いである。

——本 論——

少し「初版あとがき」「決定稿に寄せて」の抜粋が長くなるが、これらを取りまぜて話を進めていこうと思う。

——「初版あとがき」より抜粋——

「前に発表された際、これは戦争肯定の文学であり、軍国精神鼓吹の小説であるとの批判が、かなり強く行われた。

この作品の中に、敵愾心とか、軍人魂とか、日本人の矜持とかを強調する表現が、少からず含まれていることは確かである。だが、前にも書いたように、この作品に私は、戦いの中の自分の姿をそのままに描こうとした。ともかくも第一線の兵科士官であった私が、この程度の血氣に燃えていたからといって、別に不思議はない。我々にとって、戦陣の生活、出撃の体験は、この世の限りのものだったのである。若者が、最後の人生に、何とか生甲斐を見出そうと苦しみ、そこに何ものかを肯定しようとはがくことこそ、むしろ自然ではなからうか。

戦歿学生の手記などをよむと、はげしい戦争憎悪が専らとり上げられているが、このような編集方針は、一つの先入主にとらわれていると思う。戦争を一途に嫌悪し、心の中にこれを否定しつくそうとする者と、戦争に反撥しつゝも、生涯の最後の体験である戦闘の中に、些かなりとも意義を見出し、死のうと心を砕く者と、この両者に、その苦しみの純度において、悲惨さにおいて、根本的な違いがあるであろうか。

このような昂りをも戦争肯定と非難する人は、それでは我々はどのように振舞うべきであったのかを、教えていたゞきたい。我々は一人残らず、召集を忌避して、死刑に処せらるべきだったのか。或いは、極めて怠惰な、無為な兵士となり、自分の責任を放棄すべきであったのか。——戦争を否定するということは、現実に、どのような行為を意味するのかを教えてもらいたい。単なる戦争憎悪は無効であり、むしろ当然過ぎて無意味である。誰が、この作品に描かれたような世界を、愛好し得よう。もし、戦争の唯中の赤裸々の姿を批判なしに、今更発表することは有害だというなら、話は別である。私はそのことに、一つの意味を認めている、と答えるほかない。

敗戦によって覚醒した筈の我々は、十分自己批判をしなければならぬが、それ程忽ちに我々は賢くなったであろうか。我々が戦ったということは、どういふことだったのか、我々が敗れたというのは、どういふことだったのかを、真実の深さまで悟り得ているか。——少くとも私は、そうではない。私は考える。先ず、自分が自分に與えられた立場で戦争に協力したということが、どのような意味を持

っていたかを、明らかにしなければならぬ。私の協力のすべてが否定されるのか、またどの部分が容認され、どの部分が否定されるのかを、つき止めなければならない。そうでなくて、日本人としての新生のいとぐちを、どこに見出し得よう——先ず率直な自己展開を自らに課した所以である。

しかし、その時のそのまゝの姿を批判をまじえずに扱ったことに対しては、いつの日か、自身の批判を以てその裏打ちをしなければならない責任を感じている。

昭和二十七年七月

実に力強い文章である。たとえ論理性に欠けるとしても、そのような言葉をはじき出してしまふほどの力強さがあり、小田実氏の言う被害者体験・被害者意識の微塵も感じられない。生きる力を私に与えてくれる——そう言ってもよい文章だと私は思っている。なぜであろうか。それは、この文章が徳之島の沖合に沈んでいた戦艦大和と三千の屍をこの目で見つつ、生きて帰った一学徒の鎮魂の文章であるからであろう。吉田満氏は問いかける。——それ程忽ちに我々は賢くなったのか。そして真実の深さまで悟り得ているのかと——生きる力を与えてくれる文章、これこそ我々が学ぶべき道であると思う。

——「決定稿に寄せて」より抜粋——

『この作品の初稿は、初版あとがきにあるように、自分がこの戦争を如何に戦ったかを赤裸々に記録することによって、戦後生活出発の手がかりにすることを動機として書かれた。われわれが人間と

して生きる責任が、終戦を境に断絶してしまうものでない以上、平和な時代への転換にあたって、それぞれの戦中体験を正確に再現し、そこに含まれた意味を自ら確認することは、当然なさるべき務めであると考えたのである。

しかし戦争の中に組みこまれた自分の所業を、正直に表白するという執筆態度は、占領軍の検閲方針に触れて出版は難航をきわめ、出版後も多くの読者から、いたずらに戦争の悪夢をよびさますものとして指弾を受けた。戦時中のわが言動の実態を吐き出すのでなく、逆に戦争にかかわる一切のものを否定し、自分を戦争の被害者、あるいはひそかな反戦家の立場に仕立てることによって、戦争との絶縁をはかろうとする風潮が、戦後の長い期間、われわれの周囲には支配的であった。

したがって、戦後ほぼ三十年を経たいま、決定稿発刊の氣運を見るのは、望外のことである以上に、今日の日本の状況がそこまで立ち至ったかとの感なきをえない。戦艦大和の終焉とそれに殉じた人々の命運は、日本人が残した栄光と転落の象徴としてわれわれの眼前にある。「もしも、……あの場合……」といった結果論的な仮説や、戦後社会からの一方的批判の余地の許さぬ必然の事実として、近代日本がたどった歴史の一過程としてそこにある。この「必然」の指し示す方向とその限界を明らかにすることは、今日、深い混迷の中にいるわれわれが、自己を再発見する上で無意味な試みではあるまい。

昭和四十九年六月

大変、明確な文章である。小田実に答へる上で、かつまた自らの気持ちを整理する上で、明確な文章である。自分を戦争の被害者、あるいは反戦家の立場に仕立てることによって、戦争との絶縁をはかるうとする風潮こそ、作家小田実氏がどっぷりのめり込んでいる世界である。さらに吉田満氏は次のように問いかける。——「もしも……あの場合……」といった結果論的な仮説や、戦後社会からの一方的批判の余地の許さぬ必然の事実として近代日本がたどった歴史の一過程として大東亜戦争はあるのだと——深く自らの心にきざみつけておくべき言葉であると思う。そして、このことをあらゆる議論の出発点として行かなくてはならないと思う。そうでないとしたら、あらゆる死を無意味なものとしてしまふ。

ま と め

一、戦争を一般論的、概念的に議論してはならぬ。

二、とりわけ、大東亜戦争の議論においては、それが結果論的な仮説や、現代からの一方的批判の余地の許さぬ必然の事実としてあるわけで、この点を常にわすれずに、今後とも勉強すること。

三、小田実氏の言う被害者体験より発せられた思想は、右の二、を氏みずからおこたっており、かつまた、その思想の根本が自己の世界に固執した、きわめて自分かっつてな生き方を意味している。これは、本来、日本人が大切にしてきた生き方に反する。

— 終　　り　　に　　—

大東亜戦争をいかに考えたらよいのかという問題が、戦後生まれの自分にはある。いたらぬ点の多きは、百も承知で現在までの歩みとしてここに記した。

拝啓

〔歴生会新入生勧誘原稿依頼状〕（昭和五十二年三月）

東工大修士課程
二十三才

寒さ厳しき折、歴生会諸氏にはいかががお過しのことでしようか。

歴生会におきましては、本年度無事めでたく大町兄、古宮兄の卒業と相なり、来年度より皿田兄を中心として再出発のことと相なりました。

さて、その第一の仕事として、来年度の新入生勧誘ピラ作成を考えております。来年度は、従来の一枚ピラの習慣を破り、五、六枚の内容ある勧誘ピラを新入生一人一人に一部づつ、配布する計画を立てております。これは、一人一人の人間の心を動かすには、それ相当の内容ある勧誘ピラをもってせねばならぬとの反省から生じたものです。来年度は、その結果を見て、マン、ツウ、マン勧誘運動に乗り出す覚悟でおります。勧誘ピラは、原則として歴生会OB（内田、大岡、奥富、布瀬、島崎、大町、古宮）学生（皿田、小田村、広岡、小野）計十一名の歴生会諸氏全員になんらかの形で書いていただく予定にしております。

そこで、今回、原稿依頼の事と相なりました。内容につきましては、原稿用紙三枚以内に、新入生をむかえるにあたって、歴生会諸氏感じる所を書いていただきたく思っております。但し、天皇様のことにつきましては、内容が重大であり、かつまた、簡単に勧誘ピラで取扱える事ではありませんので、

この点だけはさけていただきたく思っております。なお、勧誘ビラでは、私達の志を表わす意味で、職業（学科）・氏名・年令を記するつもりでありますので、その旨御了解していただきたく思っております。

右の旨、かつてながら御了解していただくと同時に、原稿は、印刷の都合上、三月二十日（日）必着の旨よろしくお願い致します。なお、それまでの連絡は次の通りです。寒さ厳しき折、歴生会諸氏にはくれぐれもお体を御大切にして下さい。

今年、春の訪れが大分遅くなりそうです。

歴生会諸氏各位 殿

敬 具

（文責 島崎）

歴史を蘇らせる力

（「東工大歴生会勸誘パンフレット」より） 東工大修士課程
昭和五十二年四月 二十三才

本大学の比較文化学の教授であられ、かつまた評論家でもあられる江藤淳氏の隨筆に「世阿弥に思う」という文があります。これは江藤さんが、英米文学の研究のため、アメリカ留学した際の自らの内面的体験を書いたものであります。

「そう思うと私は英米文学の片すみにとりついて、うろろろしている自分が妙にこっけいに見えてきた。それは彼らの伝統に属し、その伝統は私を異質の局外者として冷ややかにむかえるにすぎなかったからである……。そう思い暮しているうちに、私はある晩なに気なく世阿弥の『風姿花伝』を開いた。するとそこには心にしみ透るような言葉があった。私はいつの間にかその一小節を音読していたが、そうするうちに私の内部にはある言いあらわしがたい充実した感情がわきあがって来た。つまり私は世阿弥の言葉をよく理解することができたのである。単に字面の上だけでなく、自分の血肉にひびく切実な言葉として。私は知らぬ間に少し涙を流していた。私は能をめたに見なかったし、世阿弥についても通り一遍のことを知っているだけであった。しかし私はたしかにわかったという手ごたえを感じながら、深い感動を覚えていたのである……。私にとって自分の存在の核心につながる言葉はただ一つしかない。これは大切な発見であった。そう思ったとき『古事記』『万葉集』から今日

にいたる日本文学の持続は、ひきうけなければならぬある有機的な全体として私の眼の前に浮びあがって来た。その背後にはなつかしい日本という国があった。」

私はこの文章が好きであります。それは江藤さんが風姿花伝という古典を通して日本の歴史を偲んでいるのであり、蘇えらせているからだと思います。古典や和歌を通して日本の歴史を学ぶことは実にひろやかにしてさわやかな世界であります。

とりわけ日々の忙しい日常生活からふと離れて、そうした一時の時間をもつことは僕にとってかけがえのない生活のひとつであります。そこにはなにかしら言いがたい文化的香りがするのであります。

歴生会で古典や和歌を学んで四年、それは僕にとってかけがえのないもう一つの大学生活でありました。そのことが、専門学問とどう結びつくのかは今だ確信たるお答えは出来ませんが、かと言ってもし古典や和歌にめぐりあえなかったならば、今の生活は味気ないものになっていたでしょう。

「講孟餘話」 輪読感想文

(「学びの道」―「資料」)

東工大修士課程
二十四才

「英才の教育」を輪読して

昭和五十二年十二月七日

「是れ余が志なり」この一言の中に生き生きとした松陰の生き方を感じる。本書一七二頁に（皿田兄指摘）「若し僕、幽囚の身にて死なば吾れ必ず一人の吾が志を継ぐの志をば後生に残し置くなり。子々孫々に至り候はばいつか時なきことはこれなく候」と黙霖への書簡に述べられている。おのが志を継ぐもの、志を継ぎ得るに値する者こそ、いわば英才といえる。松陰の言の葉の一つ一つに、力強い彼自身の生き方、いわば志が記されていて、勇気づけられる。国文研における諸先生の生き方を支えているものも、松陰が「英才の教育」で記している生き方そのものであると感ずる。いまだ、自分としては、諸先生方の志を完全に自分の力としていないが、今後、より明らかに自分の志を確かなものにしたいたい。

小田実の天皇論

(「国の息吹き」第四十四号・昭和五十二年十二月九日)

東工大修士課程
二十四才

「小田実の天皇論」批判ということで、第三〇回研究会(昭和五十一年十月)で発表した。その時の問題点として、小田実氏の物の考え方それ自体に批判すべきものがあるのではないかという点が、指摘された。以上の点を中心に今回あらためて発表する機会をえたので、ここにまとめた。

さて、小田実の思想の出発点として、「難死の思想」ということがあげられる。すなわち、

「あの死をどんなふうに考えることができるか。たしかなことは、彼らの死がいかなる意味においても「散華」ではなく、天災に出会ったとでも考える他はない、いわば「難死」であったという事実、ただ、それだけであろう。その「難死」は私の胸に突き刺さる。戦後二十年のあいだ、私はその意味を問いつづけ、その問いかけの上に自分の世界をかたちづくって来たと言える。「難死」に視点を定めたとき、私にはようやくやささまのことが見え、逆に「散華」をも理解できる道を見出せたように見えた。」

(「難死の思想」より抜粋)

なお、「難死」というのは、空襲などによる非戦闘員の死を指し示す言葉で、この言葉自体、広辞苑にないことから察すると、小田実みずからの創作用語と解釈できる。

このように、小田実の思想の出発点が「難死」にあるとするならば、小田実の思想の問題点もおの

ずからそこに内在するはずである。そこで、以上の点に注目しながら、次の文章を参照したい。

「そして、私にとって死とは、決して特攻隊員の死のように、たとえば「散華」という名で呼ばれるような美しいものでも立派なものでもなかった。また、彼らの死のように、「公状況」にとって有意義な死でもなかった。私が見たのは無意味な死だった。その「公状況」のためには、何の役にも立っていない、ただ、もう死にたくない死にたくない逃げまわっているうちに黒焦げになってしまった、いわば、虫ケラどもの死であった。その虫ケラどもは武器をもっていなかった。ということは、特攻隊員のように戦場の勇士のように自らの死を「公状況」のために有意義なものとする手だてをもっていなかったことだろう。つまり、彼らは「私状況」を「公状況」に結びつける手だてを、思想的にも現実的にももっていかなかったのである。……： 彼らには、たとえば腹をかき切ることによって「公状況」に殉じることができるといふ（すくなくとも、そうした自信をあたえることのできる）理念やロマンティズムはなかった。また、実際に腹をかき切るための道具がなかった。つまり、彼らは、たとえば八月十五日に自害し果てた右翼の若者たち（ある意味では、立派であり、そして何より美しかった）ともっとも遠いところにいた。もっとも遠いところで死んで行った。彼らの死は立派でもなんでもなく、ただ、みにくく、その人たちの美学からもっともかけ離れていた。

私が八月十五日をめぐる死として思い浮かべるのは、その右翼たちの死ではない。私が想起するのは、いや、いやおうなしにねちねちと私の記憶のなかにいつまでもあるのは、その前日だったかに

あつた大阪の大空襲のなかで殺されて行った人たちの死である。……

あれこそ、もっとも無意味な死ではなからうか。」（「難死の思想」より抜粋）

ここで、小田実の特攻隊員の死を美しく、立派なものとしながらも（その意味では、一見問題はな
いように見えるが）戦死者を二つに分けているのである。すなわち

。特攻隊員の死 || 美しく、立派なもので有意義な死

。非戦闘員の死（難死）|| 虫ケラの死であり、みにくく無意味な死

問題は、ここに内在する。すなわち、祖国の無窮の生命を感じるならば、空襲の中に逃げ場を失い、
かなしくも死んでいった同胞の死を永久のかなしみをもって感じるはずである。すくなくとも、有意
義・無意味といった死の意味をわける作業などなされることはない。

国民同胞五十二年十月号に山田輝彦先生は次のように思いを述べられている。

その題は「戦死は犬死か——三十三回忌の年に思ふ——」としたもので

「美しい、壮烈な死に場所に恵まれるチャンスは稀だし、多くの戦死者は、無量の思ひを抱いて、
非命に斃れて行ったのだ。天皇陛下万歳を叫んで死んだ人もゐたであらうし、戦争を呪咀しながら死
んだ人もゐたであらう。しかし、その人々の、かけがえないのちの代償の上にはじめてわれわれ
の「生」があるといふ事実は動かしがたい。」

特攻隊員の死も難死も、かけがえないのちの代償であるはずである。小田実が特攻隊員の死を

有意義な死と感じた点においては、確かに、小田実の国を思う意識がまっただくなく、たとは言いがたい。しかし、どうもかたひじはったぎしぎししたものであったと感ぜざるをえない。すくなくとも、空襲を体験する以前から、国を思うみずみずしい心・国民同胞感が失なわれていたのではないだろう。だからこそ、空襲において死んで行った人達の死を虫ケラども無意味な死としかとらえられなかったのだし、ひとたび、小田実自身に空襲のもたらす被害がふりかかった時には、いとも簡単に祖国の生命を感じる力を喪失してしまったのであろう。明らかに残ったのは、己の生命のみに固執する小田実の人間像にはかならない。ここに、現在の小田実氏の思想の根底とそれのさし示す問題点がある。

私達が学ぶべき学問とはなにか

〔国の息吹き〕第六十号
昭和五十四年四月十日発行

丸善石油化学(株)
勤務 二十五才

「戦艦大和の最期」 吉田満著について

昭和52年冬、歴生会の合宿にて、吉田満著「戦艦大和ノ最期」を読んだと題して発表した。発表において、小田実氏の文章に対比して吉田満氏の文章に実に力強い生き方を感じるとの自己見解を述べた。その後、発表内容について、小柳先生より、吉田氏の文章の中にも、さまざまな問題ありとの御批判をいただいた。それは、私達が学ぶべき学問とはなにかという問いかけであった。発表後、なんらかの形で整理したく、今回、国の息吹きの会で発表する機会を得ましたので、まとめてみました。

はじめに、小田実氏、吉田満氏それぞれの文章を紹介する。

小田 実氏「難死の思想——平和の倫理と論理」より

「実際、戦後の出発点、八月十五日体験の底にあるのは、多くの場合、強烈な被害者としての自覚であるにちがいない。体験の記録の筆者の多くが、有名無名をとわずそのことにふれて書いた。そして私たちの多くが、その自覚を踏み台として、過去の戦争を眺め、また、戦後の状況に対応したことは言うまでもない。おそらく、被害者体験、そして、その自覚は、戦争と戦後をつなぐ一つの重要な支点として働いていたにちがいない。」

まさしく、被害者意識の文学であり、歴史の喪失の文学である。

吉田 満氏「初版あとがき」より抜粋

『前に発表された際、これは、戦争肯定の文学であり、軍国精神鼓吹の小説であるとの批判がかなり強行われた。

この作品の中に、敵愾心とか、軍人魂とか、日本人の矜持とかを強調する表現が、少からず含まれていることは確かである。だが、前にも書いたように、この作品に私は、戦いの中の自分の姿をそのままに描こうとした。ともかくも第一戦の兵科士官であった私が、この程度の血氣に燃えていたからといって、別に不思議はない。我々にとって、戦陣の生活、出撃の体験は、この世の限りのものだったのである。若者が、最後の人生に、何とか生甲斐を見出そうと苦しみ、そこに何ものかを肯定しようとおがくことこそ、むしろ自然ではなからうか。

戦没学生の手配などをよむと、はげしい戦争憎悪が専らとり上げられているが、このような編集方針は、一つの先入主にとらわれていると思う。戦争を一途に嫌悪し、心の中にこれを否定しつくそうとする者と、戦争に反撥しつつも、生涯の最後の体験である戦闘の中に、些かなりとも意義を見出し、死のうと心を砕く者と、この両者に、その苦しみの純度において、悲惨さにおいて根本的な違いがあるであろうか。（いうまでもなく、戦争の上にあぐらをかき、これに利己的に妥協し、便乗していた者は論外である。

このような昂りをも戦争肯定と非難する人は、それでは我々はどのように振舞うべきであったのかを、教えていただきたい。我々は一人残らず召集を忌避して死刑に処せらるべきだったのか。或いは、極めて怠惰な無為な兵士となり、自分の責任を放棄すべきであったのか。——戦争を否定するということは、現実には、どのような行為を意味するのかを教えてください。単なる戦争憎悪は無力であり、むしろ当然過ぎて無意味である。誰が、この作品に描かれたような世界を、愛好し得よう。

もし、戦争の直中の赤裸々の姿を、批判なしに、今更発表することは有害だというなら話は別である。私はそのことに、一つの意味を認めている。と答えるはかはない。

敗戦によって、覚醒した筈の我々は、十分自己批判をしなければならぬが、それ程忽ちに我々は賢くなったのであろうか。我々が戦ったということはどのようなことだったのか、我々が敗れたというのはどのようなことだったのかを、真実の深さまで悟り得ているのか。——少くとも私は、そうではない。私は考える。先ず、自分が自分に与えられた立場で戦争に協力したということが、どのような意味を持っていたかを、明らかにしなければならぬ。私の協力のすべてが否定されるのか、またどの部分が容認され、どの部分が否定されるのかを、つき止めなければならぬ。そうでなくて、日本人としての新生のいとぐちを、どこに見出し得よう——先づ率直な自己展開を自らに課した所以である。しかしただ、その時のままの姿を批判をまじえずに扱ったことに対しては、いつの日か、私自身の批判を以てその裏打ちをしなければならない責任を感じている。」

前回に述べた所感は以下のとおりである。

「実に力強い文章である。たとえ、論理性に欠けるとしても、そのような言葉をはじき出してしまふほどの力強さであり、小田実氏の言う被害者体験・被害者意識の微塵も感じられない。生きる力を私に与えてくれる——そう言ってもよい文章だと私は思っている。なぜであるうか。それは、この文章が、徳之島の沖合に沈んでいた戦艦大和と三千の屍をこの目で見つつ、生きて帰った一学徒の鎮魂の文章であるからであるう。吉田満氏は問いかける。——それ程忽ちに我々は賢くなったのか。そして真実の深さまで悟り得ているのかと」

今、吉田氏の文章を読みかえしてみても、吉田氏の文章の誠実な所に、力強い所を感じる。が、しかし、小柳先生の御指摘のとおり、吉田氏の文章の中にもさまざまな問題ありとの感あり。ここで先生の文章を紹介したいと思う。

「小田実氏のドグマに満ちた文章に対比して吉田満氏の誠実な言葉に強くひかれてをらるる御様子一応もつともだと存じますが、吉田氏の言葉の中にもさまざまな問題あり、一口に申してあの当時日本が直面していた運命に対する具体的な配慮、関心に乏しく、そのため、自己の世界に閉ぢこめられたままで、その中でのみ何かを求めようとする閉ざされた人生態度に大きな問題ありと感じました。例えば、「若者が最後の人生に何とか生甲斐を見出そうと苦しみ、そこに何ものかを肯定しようとはなくことこそ自然ではなからうか」とありますが、そこには、祖国の運命を自分自身の運命と感じる

といふ生き方は、失はれてゐます。明治の初め、福沢諭吉は、祖国が侮蔑されるような時には、「蜂尾の刺蝮にふるることく」すなはち、蜂から刺されたやうに反応する生き方を持備すべきだと言つてをりますが、祖国の危急に際してその打てばひびくやうに応ずる生き方こそ私達が学ぶべきところではないでせうか。苦しんだり、あがいたり——そのやうなことでどうしてひろやかにしてさはやかな生き方が約束されるでせうか。所詮は、大正から昭和にかけてひろがってきた国家と個人との「肉ばなれ」の現象が生んだ閉塞的的人生觀の所産であると思はれてなりません。この間の事情は、「短歌のすすめ」の中にある和多山、松吉、寺尾という方々ののこされた和歌と対比していただければ明らかになると思ふ。と同時に日本があゝの当時置かれてゐた国際情勢の中の苛烈な姿を見てゆけば吉田氏の言といへど自己にこだわる感傷にすぎないことがわかつてくるのではないでせうか。

勿論、小田実氏のドグマとは比較すべくもなく、吉田氏の人生には、それなりの手応えは感じられますが、さればといつてこの重大な問題を見のがすことは許されないでせう。吉田氏の戦争觀についても断然よくよく考へていただきたいと思ひます。」

「あの当時、日本が直面していた運命に対する具体的な配慮、関心に乏しく、そのため自己の世界に閉ぢこめられたままで、その中でのみ、何かを求めようとする閉ざされた人生態度に大きな問題ありと感じました」との御指摘、ここに吉田氏の文章の与えてくれる限界がある。「吉田氏の人生にはそれなりの手応えは感じられるが、さればといつてこの重大な問題を見のがすことは許されない。」と

はまさしくこのことである。

さらに、先生は私達が学ぶべき学問とはなにかとの問いかけをされている。

「例えば、「若者が最後の人生に何とか生甲斐を見出そうと苦しみ、そこに何ものかを肯定しようとかあぐくことこそむしろ自然ではなからうか」とありますが、そこには、祖国の運命を自分自身の運命と感じる生き方は失はれてゐます……。祖国の危急に際してその打てばひびくやうに応じる生き方こそ私達が学ぶべきところではないでせうか。苦しんだり、あがいたり、――そのやうなことでどうしてひろやかにしてさはやかな生き方が約束されるでせうか。」

文中で、「短歌のすすめ」を読んでゆけとの御指摘をうけ、また、その後「いのちささげて」も発行され読みすすめているが、現在までの所を整理つかぬままに書けば、和多山、松吉、寺尾さんといった方々の生き生きとした生き方に限りない力を感じるのである。関先生の言葉をかりれば

『はつきりとした自意識と透徹した人生観を祖国日本の永遠の発展の中に確立していた人々であった。生も死も一つに考えることが出来た人々であったのである』（「いのちささげて」より）

これから、こうした人達のことを勉強したいと思う。これについては、次の自分自身の課題として
のこす。

勉強不足で整理のつかぬままであるが、現在までの歩みとして記した。

合宿勧誘をふりかえって

（「国の息吹き」第七十八号・
昭和五十五年十月）

丸善石油化学㈱
勤務 二十七才

一、今年の合宿教室終了時における走り書き、感想文に記載された小田村先生のはしがきに大変、新鮮な感動を受けた。以下に引用する。

『さいごに一言申したいことは、私共は至難な国運のさなかに生きつづけてゐる、といふ痛感を、すべての「国文研活動」の基本に息づかせていかねば、といふことについてです。合宿に若い人々を集めるのは、合宿を成功させるためだけではない、祖国の危急を担ふ人士を、一人でも多く集め、養成していかなくは、祖国の悠久の生命に断絶の時が来てしまふ、それを救ふためにこそ、合宿教室の開催があるのだ、といふ自覚こそ、会員各位ともどもに、心の中にしっかりと植ゑつけて進まうではないか、といふ私からの提言であります。』

これと関連して、八月国の息吹きの会が開かれた。かなり重要な点が、小田村先生、長内先生をまじえて討議されたようです。詳細は小柳メモを御参照下さい。

一、長期的立場から学生を育てることの重要性を感じている。

大学における輪読会の充実が必要であると認識している。ここを充実しなくては、学生はなかなか育って来ないのではないのだろうか。千葉大学での勧誘活動も、なんとしても千葉大学で輪読会

を開きたかったからであったわけで、僕を含めて、若手OBの一層の努力が必要である。

一、秋合宿は、学生が育つ場であり、来年にむけてのスタートでもある。

昨年の秋合宿で学生が二、三名育ち、今年の学生の中心になってくれたことを考える時、今年も多くの学生諸氏とともに、充実した秋合宿を成功させねばと思う。私については、転勤等で、なにかと自分のことにおわれ、現状を正しく認識するにいたらず、気がかりになっている。十一月より筑波勤務、落ち着き次第、新たな展開に乗り出すつもりです。

昭和五十五年十月十四日 記

「合宿教室感想文集」より

一、第十八回雲仙合宿（第十七班）東京工大二年（二十才）

「僕の第一歩」

真に日本的なるものが真に国際的である、と言われた村松先生の言葉が、心をうってやまない。小田村先生が「大和言葉の中に生きてゆく豊かな心」と言われ「言葉の世界こそが、日本をそして日本人を語る第一歩」と言われた。僕は「今この第一歩に立てたのだ」ということに大いなる喜びを感じている。

大いなる感動、自然をみつけた時におどろく小さな感動、そうした感動を歌によりあげて行く時、脈々と心のなかに息づく自分を発見できたのだ。これからも歌って行きたい。今みつけた短歌の世界を少しつつ広げて行く中で、すばらしき古典の世界を築きあげたい。今回の合宿で、やっとここに立つことができた。それは僕のまさしく第一歩なのだ。その第一歩から祖国を語ることにしよう！

一人しておりゆく山の道すがらどこからとなく笛の音する

二、第二十一回佐世保合宿（指揮班）東京工科大学院修士一年（二十三才）

さざなみの静かなる湾を音たてて船はゆくなりすべるがごとく

三、第二十四回霧島合宿（国文研班）丸善石油化学勤務

始めは、どうなるかと思つたが、こうして山を下りる時には、班員の心が一つに統一されてゐるとの確信を感じます。ただ、私も含めて、班員それぞれがかかえてゐた問題も歩み方も違つてゐました。

○ 思ひを新たにする友

○ 御歌にしっかりとりくんでゆかうとする友

○ 一人でもいい、なにしろ友を合宿に連れてくる、とちかふ友、等

学生を合宿につれていきたい。そして学生を育てたい。その学生がするであらう心の葛藤に対して、私自らがそれをつつみうるだけの確信を得たやうに思ふ。仕事もある。しかし、信じた道をつらぬいてゆきたい。

友

己が思ひ干々にみだれてわからむと友は語れり涙流しつづつ
うつむきて涙をながす友の前に語りかけむにも言葉いで来ず

大野君の発表を聴きて

つまづくもたゆまず歩みし友どちの学ぶ姿に勇氣づけらる

四、第二十五回雲仙合宿（班付き）丸善石油化学勤務

はじめての「班付」ありがたうございました。班の学生諸君と一緒に輪をつくり学ぶにつけ、七年前はじめて学生として、この雲仙にはせ參ぜし時のことが色々と思ひうかんで来ました。昨日は、当時班長であられた阪本さんと楽しいひとときを過しました。思ひおこせば、僕は学生時代班長経験をしてゐません。道につまづきながらも、ただただ良き先輩、良き友にはげまされながらなんとかして、七年間学んできたのだと思ひます。そのやうなわけで、「班別討論」でも、学生諸君に多くは語れませんでした。ただ常に、疑問を投げかけることをしてゐたやうです。そして、自分のしみじみとした体験を語るだけだったやうでした。

「班員諸君」は、本日八月十一日最後の「班別懇談」、まさしくどたんばになって、この四泊五日のしみじみとした体験を語ってくれました。一人一人にたしかなたへが感じられ、心からうれしかったです。四泊五日間をともにやってきて、よかったと思ひました。思えば「班付」などといふことを離れて友らにはげまされてゐるのは、自分なのだ、とつくづく思ひました。頭がぼーとしてゐます。

(今後の方針) 一、千葉大学での運動を今後とも続けてゆく。二、秋合宿の成功が、来年の合宿への大きなステップになるまで、この問題を当面の重大事とする。

去年の友を憶ふ

一年前ともにごせし君なれば姿の見えぬはさびしかりけり
君をればうれしきことのくさぐさを語らふことのかなひしものを

○

えにしありてこの雲仙に集ひし時ゆはや七年の時は過ぎけり
はじめての合宿の地なりせばくさぐさのことのしのばる床に入りても
各地よりつどへる友らと輪をつくり学びゆくことのおれしかりけり

五、第二十六回阿蘇合宿（指揮班）丸善石油化学（株）研究所技師（二十八才）

担当の仕事のため、小田村先生の御講義「長寝しつるかも」―世界に誇るに足る日本民族再生への道は―と、長内先生の「合宿をかへりみて」をお聞きできませんでした。大変残念です。

（编者から―君は在京中ですので、後日事務所でテープをお聞きになられたら、と思ひます。その節は、機械はご持参下さい。）

今年、合宿にのぞむ心がいささか弱まってゐましたし、また体もいささか弱まってゐましたので、合宿を乗りきれぬだらうかと心配な気持ちで阿蘇にのぼってまゐりましたが、どうにか合宿全日程を終へ、閉会式をむかへられましたのでほっとしてゐます。

小柳志乃夫君の「青年研究発表」において、お母さんからの手紙の中に「ぐるぐる頭がまはつてゐます」と書いてありましたと紹介された折、小柳君がそれを読んでどうしようもなく、ただ涙がながれてながれてしかたなかったと話された時には、余韻のある感銘を受けました。

大空を流るる雲は移ろひて山のかなたに流れゆくなり

流れゆく雲のあはひゆ陽の洩れて高きみ空の見ゆる時あり

○

おごそかなるみたままつりにいただきしなほらひのみき甘くうましも

遺 歌

一、慰霊祭献詠歌

戦没学徒のみ歌に

(昭和四十八年九月二十三日 二十才)

苦しい時悲しい時に「友に」とふみ歌を読めばはげませられる

(昭和五十四年九月二十二日 二十六才)

亡き人の残せし文を読みゆけば乱れし心も静まりてゆく

いかならむこと起るとも亡き人の思ひしのびて生きてゆかなむ

(昭和五十六年九月二十三日 二十八才)

みどりこき阿蘇の山よりかへり来てはや一月の時はずぎけり

大原合宿

昭和四十九年六月二十二・二十三日 二十才

白き波寄せては返す砂浜を友らとともに自転車をこぐ
砂浜を潮風をうけペタル踏みかなたの白き燈台目指せり
燈台へと通づる急な坂道を自転車こげば汗の吹き出る
目の前に開けし海を見てゐれば体の汗もいつしかとやむ

宿に着きて

吹く風のどことはともなし潮のにおいここ大原は漁村なりしか
道端のわきに咲きたるひまわりのすらりとしたる姿美し

東工大の生協のわきに咲いているあじさい

どんよりと暗く曇りしつゆ空に薄紫のあじさい咲けり

敷島の道

東工大三年 二十二年才

「朝の満員電車にて」

昭和四十九年十月二十四日

朝早く満員電車でかたわらの老人ひとり何やらつぶやく
老人の何やらつぶやく一人言酒の臭いもかすかにしたり
いかならむ不平不満のありとともくさってはならぬいじけてはならぬ
ひたむきな心で生きれば人の世は自然と人のあたたかく迎えむ

昨日リポートを書いて

昭和四十九年十月二十四日

ふとんのぼかばかとしたぬくもりに起きる気持ちもついぞおこらぬ
ぼんやりとふかすたばこのけむりをば何もしないで一人見つめる

レポートを書き終えて窓を開けた時の歌

昭和四十九年十一月十二日

街灯のあわき光で電線の水玉白く連なりてをり
自動車の通り過ぎればあたりには静けさ戻り虫の音聞こゆ
虫の音を耳をすまして聞き居れば今夜のすずしさ肌に感ぜり

図書館の休憩室にて

昭和四十九年十一月十六日

だれも居ぬ休憩室のいすにすわれれば今日一日の疲れも快し
窓辺にてくもりしがラス手でぬぐえばその冷たさが手に感ぜらる
朝からのふりにし雨で道もぬれ街灯の灯道に映えをり

二、学生歌の会

田島衛議員の発言記事を読みて（昭和五十一年十月一日付サンケイ新聞）

昭和五十一年十一月十一日

ひとつしかなき生命すら賭けえても悔いなき生命と君は語れり
若き日にいただきし真心今もなも君は伝へり世は変われども
国がらを守りつづけしますますをの歩みし道を我も歩まむ

正大寮「しきしまのみち会」にて

昭和五十一年十二月九日

しきしまの会での長内先生との出会い

喜びや悲しみを歌にたくせと先生は若き僕らに語りたまへり

師の御言葉あたため帰りしあの日より早ふた月の時は過ぎけり
喜びや悲しみを歌にたくして残せとふ師の御言葉は今も残れり

○

一枚のはがきに込めらる寮生の学びの熱意に答へて行きたし

東京地区O・B合宿にて、氷川神社参拝の折（東京・渋谷）東工大修士一年・昭和五十二年二月十

三日

国守る神にむかひて先輩は明治の君の御歌よまれる

目に見えぬ神にむかひてはじざるは人の心のまことなりとふ

御歌よむ先輩の言葉は美しき調べとなりてひびきわたれり

この朝のすがしき思ひもて明日からは明治の君の御歌よまなむ

この朝の新たな思ひとこしえにもちて歩まむ学びの道を

東京地区秋季合宿記録集 昭和五十四年十一月二十二〜二十五日

歌と感想文

松陰の書を、かくまで深く輪読したのは初めてでした。今はただただ松陰の「思ひの深さ」がしのばれて身が正される思ひがわき上がって来ます。

また、学生諸君の道を求めんとする姿、そしてこれを叱咤激励する諸先輩に接して、初めて僕らの運動の原点に帰った思ひです。思へば、すべては僕自身の「思ひの深さ」に帰ってくるやうです。

昼夜にわが志をはげまして学びゆかなむ友らとともに

○

とつとつと友の語る言の葉に思ひしのばれうれしかりけり
ゆれ動きし友の心は定まりてわが胸内にひびきくるごと

書

簡

① 奥 富 修 一 宛

(昭和四十九年七月十七日)

お手紙有難うございました。今年は梅雨も明けずにととう夏休みになってしまいました。布瀬さんからお子さんが生まれるとのことをうかがいました。本当におめでとうございます。でも父親になるってちょっぴり大変ですね。明日(七月十七日)山の合宿で北海道へたちます。きょう一日山の仕度でつぶれてしまいました。今やっと荷物もザックにおさまりました。なんと三十キログラムもありました。もう夜中の四時、ふるから出て、きょういただいた手紙のお礼とお返事書いております。

三月の正大寮での合宿以来お会いできなくなってしまって、このことではいつかお会いできるかなと思っていましたところ、今度のお手紙本当に有難うございました。

今年の夏の合宿とうとう参加できなくなってしまって、このことではいつかおこられるのではと思って覚悟しています。山の方の合宿は七月の三十日か三十一日に終わります。始めての夏の合宿で解散になっても三、四日はどこかの宿で体を休めるつもりでいます。それから北のはて知床の山を登る予定です。歌ができましたら、お送りするつもりでいます。

自分の歌についての批評読みました。一つ「本当に感動した焦点がはっきりしないきらいがある」と言われたことが、即ち自分の生活態度のなにかのうらづけのような気がして、考えなくてはいい

ぬのではないかと…… 夏以後の歴生会では短歌をやるとかで今から楽しみにしています。

それから別の話ですが、どうしてもお話したくて、歴生会最後の日布瀬さんと大町君と自分（古宮君は、この日用事で途中で帰られました）で、うち上げをやって布瀬さんと大町君と緑が丘でわかれた後、大岡山に来て、皿田君となんとなくもう一軒行こうかということになりまして、飲みに行った時のことです。皿田君、飲みながらこう言うんです。「僕は水球部にいて、クラブの人のつきあいもあるが、同じ一年の人は転類や学科志望やらでどうも本当にわかり会えないんだナ……でも歴生会では、話がなんでもできるし、わかり会えるな……」僕自身、新入生の皿田君が、こう言ってくれるのがうれしくてたまらなかったのを覚えています。それは僕自身の経験でもあったからだと思います。布瀬さん、古宮、大町、皿田とたった四人の学友ですけど、大切にしなければ、など思っています。皿田君の作った歌で

初めての合宿に我寝つかれずとなりの先輩のいびきもうれし

この歌の「いびきもうれし」が僕とってもすきですし、皿田君のすなおな心がうたわれているよ
うな気がします。人と人がわかりあえ始めると「いびきもうれし」という言葉になるのかなあと
思います。

もう夜が明けました。夏は暑くてきらいですが、この夏の朝だけは、すがすがしく大好きです。お仕事、さぞかしいそがしく大変のことかと思いますが、お体御大切になさって下さい。

② 奥 富 修 一 宛

(昭和五十年三月八日)

拝啓 東京もだいぶ春めてまいりました。植木のバラの木が、毎日、小さな緑の葉を一枚二枚と増やすのを見るにつれ、春の訪ずれと自然の大きな生命がこんな植木のバラの木にも宿っているのを感じております。

正月に皆と招かれて以来、お会いする機会もなく、ごぶさたしておりますが、御家族の皆様とも御健勝の事かと存じ上げます。とりわけ、さくやちゃんも歴史会一同のアイドルになっています。

このほど、敷島の道第一集が完成しましたので、お送りいたします。私のはどうもだめですが、布瀬さん、大町君、古宮君、皿田君ともなかなか良き歌を創作しております。先輩に御感想、御意見を賜はる事ができますなら、皆のはげみにもなりますので是非よろしくお願いいたします。すでに大町君、皿田君に聞かれたことと存じますが、歌集完成と布瀬さん送別をかねた酒席にて、歴史会の歌ができました。春合宿では、東京全員で歌おうなどと話しております。ぜひ早く先輩諸氏全員と歌える日がくれば楽しいな、などと思っております。

今年布瀬さんが社会人になられ、四人のメンバーで四月から出発するわけですが、自分も自覚

新たにがんばらねばと思っております。四年生として、最後の一年、大変な責任を負っているわけですから……

それでは乱筆乱文の事かと思いますが、これにて歌集完成のお知らせをして失礼します。

敬
具

③ 大町憲朗 宛

(昭和五十二年元旦)

謹んで新春のお喜び申し上げます。

昨年は歴生会の例会や合宿と本当に御苦労様でした。とりわけ冬合宿印象深く残っております。今年はまだ卒業、これからもO・Bとしてがんばって下さい。今年もよろしく。

あらたまの年を迎へし喜びを告げまつらなむ代々木の宮へ

④ 正大寮内早大積誠会 宛

(昭和五十二年十二月十二日)

前略

「飛翔」拝読。感じる所ありますので一筆申し上げます。まず合宿後、わずか一週間そこいらで合宿記録文集を完成との事、"早稲田積誠会たのもの"との感をおぼえました。次に発表では、内海

君の次の文章に感銘を受けました。すなわち文中に「だが僕がその時、感動に涙したことは貴重な体験であり、それを信ずる他はない。自分の本当の感動をすなほに信じるといふこと、そこを出発点としてこれからの自分の学問を積んでゆきたいと思つてゐる」とある所です。また短歌詠草では、阿川君の和歌に、力強い阿川君の生き方を感じた次第であります。いい歌を作るものだと感心させられました。最後にある「あとがき」では、西川君の心豊かな思いが偲ばれてくると同時に、これからの早稲田積誠会の活躍が楽しみに思われてきました。

草々

⑤ 古川 修 宛 (昭和五十三年一月)

謹賀新年

新春早々お年賀頂きありがとうございます。

小生、四月より社会に船出しますが、実社会に出てからも、すがすがしき明治天皇の御製を日々の糧として志ざした道を歩んでゆきたいと思ひます。

本年もよろしく

明治天皇御製 　　をりにふれたる (明治四十五年)

若きよにおもひさだめしまごころは年をふれどもまよはざりけり

誠

(明治三十八年)

疾き遅きたがひはあれどつらぬかぬことなきものはまことなりけり

友

(明治三十六年)

もろともにたすけかはしてむつびあふ友ぞ世にたつ力なるべき

⑥ 国民文化研究会 宛

前略

(昭和五十三年六月二十二日)

この度、六月十五日三十万トン、エチレンプラントのスタートアップに伴い今年度の日程が決定し、その結果、先に御依頼を受けました四土会参加の件につきまして、どうしても時間的に無理と判断しましたので、ここにその旨御連絡申し上げます。

なお来年度四月より通常勤務になる予定ですので、先輩諸氏の承諾の上、参加を申し込みたいと思っております。

草々

詳細は左記の通り

六月 3直 出席可なれども、先輩の引越し手伝いの為欠席

七月 3直 出席可

八月～九月 2直 不可
十月～三月 1直 不可

⑦ 大町 憲 朗 宛

(昭和五十三年七月十二日)

暑中お見舞申上げます。

筆不精のため転地のあいさつが遅れましたが、四月より表記のとおり、丸善石油化学に勤務しております。入社そうそう約一年間の製造部門配属を命じられ、現在三十万トンエチレンプラントで交替勤務の毎日を過ごしております。それこそ、体じゅう汗だらけどろだらけ体力勝負の毎日です。正式な配属は来年で今年はなにしろ現場とはなにか、これを知ることが仕事です。寮は静かな田んぼの中にあり、夜風も涼しくよいのですが、虫が多いのには困っています。こちらへ来られる時はぜひ御連絡を。

⑧ 大町 憲 朗 宛

(昭和五十三年十二月二十三日)

前略、お便りありがとうございます。いきの良い大町君の姿が感じとられました。元気そうですね。自分に関して、ただがむしゃらにがんばっているだけです。この結果がどうであるかわかりません。今年一年は会社の仕事に全力投球のつもりです。藤井さん、石井さん、大町君には借金ばかりですが、

来年ぐらいにはがんばってかえすつもりです。

草々

⑨ 須田清文 宛

(昭和五十四年九月十九日)

前略

寮のまわりの田圃ではもう稲刈りが始まっています。いつまでも夏かと思っていましたでしたが、空の高いことといい、夜なく、くさぐさの虫の音といい、もう秋だなと思う今日この頃です。元気ですか。

小生、本日休日(十八日)ひさしぶりにのんびりした一日でした。気のむくままに「昭和史に刻むわれらが道統」を読みました。中でも、昭和三十年頃の国文研発足当時の文章を読むとただただ勇気づけられる思いです。思へば僕自身いたらなきことも多かろうと思うのですが、だからこそ不断の努力をしてゆかねばならないと思いました。

草々

くさぐさの思いをよせて友達に便りを書くはうれしかりけり

⑩ 須田清文 宛

(昭和五十四年十月十一日)

前略

元気でがんばっている御様子なによりです。

みちのくの友よりたより届ききてうれしかりけり学びの道は

東京地区は来年の合宿にむけてスタートしています。当面は、秋合宿に全力がそそがれています。運営委員長は大塩君、そろそろ勧誘ビラができそうです。山口さん、小柳君がビラの内容をチェックしています。

小生は、明日（十二日）単身千葉大学に勧誘の予定。一人でスタートです。勧誘とりわけ一人での切りこみははじめてですので、どうなることやら。がんばってみます。

草々

⑪ 古川 修 宛 (昭和五十四年十一月三十日)

前略

合宿から帰って忙しい一週間でした。火休と徹夜勤務、明日も出勤です。今日命やっと便りをかく次第です。合宿ありがとうございます。ただただ諸先輩そして友らの「深き思ひ」がしのばれて身が正される思ひでした。

草々

先輩の深き思ひのしのばれて今日の夕べに便りかくなり

⑫ 須田 清文 宛

(昭和五十四年十二月二日)

前略

元気か? たまには便り書け! 東京の秋合宿はよかった! 松陰を読んだ! 草々

⑬ 一 古川 修 宛

(昭和五十五年六月二十二日)

前略

千葉大学での勧誘状況の御報告申し上げます。これが、なによりの便りと思っています。

六月二十一日(土) 自治会メンバーと会う約束せるも、キャンセルされ一週間延期のこととなりました。同封のコピーは、当日メンバーに一読してもらおうつもりで書き上げたものです。しかたなく、メンバーの一人に郵送することになりました。文面にも記載した通り、自治会の承認を得るのはむずかしいと感じています。どう考えても、やはり、民青の運動家らしく次回は、もの別れ覚悟の上で、上記のコピーの旨をうったえるつもりです。一事で言って、あたりがいのない連中のようです。一方、勧誘の方ですが、同封の文章を四名の学生におくりました。六月十四日(土)までに会った約二十名の学生のうち、手ごたえの感じられた人達です。もっとも、住所をきかずに分れた人物もおりますが、現状としては、とりあえずこの四名におくることしかできませんので、こうしました。

千葉大学での勧誘が、自治会メンバーとのことで、一応承認がえられない現状を考え、残りの日程（六月二十八日、二十九日、七月五日、六月、十二日、十三日）の休日は、これら4名の人達をたづねることに使いたいと思っています。

以下に氏名及び住所記載

自治会メンバー	平山君	千葉市宮崎二の十一の十五	蘇我病院内
今場正好	〒二六〇	千葉市穴川四の四の五	中村様方
斉藤裕	〒二六〇	千葉市穴川四の十三の二十九	石井荘内
佐藤雅義	〒二六〇	千葉市轟町二の十の八	
五味克美	〒二八一	千葉市小仲台二の十の十四	篠原様方

もし、さそえるとしたら、今場君か斉藤君になると思っています。しかし、なにぶんまったく自信なし。それから、東京地区の二名の件ですが、東京に一度帰ると思いますので、その時よってきます。しかし、こちらの方は、できれば東京地区のOBにカバーしてもらえれば幸いです。

昨日及び今日は一日中便り書きで終ってしまいそうです。近いうち、一度正大寮に行くつもりです。

草々

⑬ 一 千葉大学生 今場正好 宛

(古川宛書簡内同封、勧誘の文面、4名それぞれ多少スタイルが違いますが(あいさつの所)は同じことを述べております。)

前略

本日、休日一日中雨。ひさしぶりにゆっくりした一日をおくっております。夕方より便り書きはじめました。二度ほど縁あって語り合う機会を得、僕自身大学生にもどったようで楽しかったです。なにより一社会人の語りかけに応じてくれたのがうれしかったです。お渡しした「日本への回帰」お読みいただけたでしょうか。

申すまでもなく、一社会人として千葉大学に来て合宿教室の勧誘をしたのは、企業人としてそれなりに充実した日々はおくっているものの、やはり、学問と人生と祖国といった問題——学問をどう確立してゆくのか、人生をどう生きたらいいの生き方ができるのか。国のゆくすえはどうなのか——が一時として心からはなれないからであります。

これは、また大学に籍をおかれる人にとっても、在籍中、真剣に考えられるであろうテーマであるわけです。

僕は、縁があって大学在籍中にこの合宿教室に参加する機会を得、以後今日まで多くの友を得、そうした友にはげまされながら、学問と人生と祖国のことを語りつづけて来ました。そうしたなかで、自分の生き方を正して来たのであります。

ぜひとも、おさそいしたく便り書きました。この夏、心ゆくまで語り合おうではありませんか。

場所が九州の地ですが、かならず、得るものがあると確信しております。

草々

えにしありてめぐりあえにし友達に便り書くなり今日の夕べに

⑬ 一三 千葉大自治会 平山 宛 (古川宛書簡内同封)

前略

本日(六月二十一日)諸君らと会える事を楽しみにしつつ、朝から話したいことを文章にまとめおりました。ところが、電話にて本日の会合は、もてないとのこと。少々平山君に憤激を感じ一筆、書きつづります。

まずもって、どうしてこうも簡単に約束を破るのか。すべての約束を守れないのは、人の常であるけれども、その時には、それなりの誠意をもって処するものだと思う。電話にしても、十円玉を用意しなくてはだめではないか。大学生なのだから、もっとしっかりしてほしい。

それから、六月二十八日午後四時会おう。なお、同封の文章は今しがた書き上げたものです。一読して下さい。

草々

はじめに、一社会人として千葉大学に来て、このような勧誘をスタートした理由をのべます。

週のほとんどを社会人として、企業に勤務し、仕事も三年目をむかえ、楽しい時もあり、つまらない時もあり、それなりに充実した日々をおくっております。ただ、かた時として、自分自身の学問をどう確立していったらよいのか、人生をどう生きたらよいのか、そして祖国が多難な時代に生まれて、どう自分を処していったらよいのか、という問題、まさしく学問と人生と祖国のことは、心からはなれない問題であるわけです。

縁あって、東工大在籍中にこの合宿教室に参加する機会を得、以後今日まで多くの友にはげまされながら、学問と人生と祖国のことを考えつづけている一人としてどうしても、大学生諸君に、この合宿教室のことを話しかけたいと思い、こうしてたち上がったのであります。

思えば、学問、人生、祖国といった根本的な問題は、大学に籍をおかれる諸君にとっては、在籍中、真剣に考えなくてはならぬテーマであり、本来ならば諸君がみずからのぞんで考えてゆかねばならない問題であります。よって、思う所あって一企業人が大学に来て、これをうったえかけても、なんら、おかしくなく自然の姿として認められると思つたのであります。

それでは、僕のうったえかけに入ります。

まず、この合宿では、自分の心を細やかに働かせ苦労しながら、物事をわかうとする姿勢をもつてお話しします。次に紹介するのは、福沢諭吉の「文明論之概略」の中の一文です。

「且又余輩に於て独立を以て目的に定むと雖ども、世人をして悉皆政談家と為し、朝夕之に従事

せしめんことを願ふに非ず。人各勤る所を異にせり、亦これを異にせざる可らず。或は、高尚なる学に志して談天彫竜に耽り、随て窮め随て進み、之を樂て食を忘るゝ者もあらん。或は活潑なる營業に従事して日夜寸暇を得ず、東走西馳、家事を忘るゝ者もあらん。之を咎む可らざるのみならず、文明中の一大事業として之を称譽せざる可らず。

唯願ふ所は其食を忘れ家事を忘るゝの際にも、国の独立如何に係る所の事に逢へば、忽ち之に感動して恰も蜂尾の刺蝿に觸るゝが如く、心身共に顚敏ならんことを欲するのみ」

僕のおかれた立場は、まさしく活潑なる營業に従事している者であります。こと仕事に關しては、日夜寸暇を得ず東走西馳家事を忘れて仕事に従事したいと思つています。ただ、其食を忘れ家事を忘るゝの際にも、国の独立如何に係る所の事に逢へば、どうしても気がかりでしかたないのであります。しかし、あくまでも一社会人であり、政治に志した者ではありません。よつて、自分のおかれた立場、それが、はじめに述べた自分の心を細やかに働かせ、苦勞しながら物事をわかつとする姿勢だと思つております。

大学生諸君ならば、一大学生として見を起すべきですし、それがひいては、心を細やかに働かせ苦勞しながら物事をわかつととする姿勢につながると確信しております。

国の問題については、人各々意見がわかれることがあるのですが、常に、これまで述べて来た姿勢をわすれてはいけません。

次に、この合宿教室では古典の輪読をします。そこでは、先人のことばを正確にたどるあいだに、先人の肉声を聞きとる努力が試みられ、学問に取り組む基本姿勢が養われます。

今回、千葉大学に勧誘に来て、あらためて心にしみる文章にめぐりあえたので、これを紹介しながら御説明します。はじめに、この合宿教室ですが、近年学生の参加人員が減少して、会の運営になみなみならぬ問題となっていることを述べなくてはなりません。こうした現状をかんがみ、一人大学生にうったえかけるという、僕のささやかな運動に入ったわけです。

「他人は當てには出来ない。自分だけが頼りだと知った時、人は本當に努力をし始める。どうあっても、切り抜けねばならぬ苦境にあって己れの持つて生まれた氣質の能力が実地に試される時、人間は、はじめて己れを知る道を開くであろう。」

この文章が、どれだけ僕を勇気づけてくれたか、古典を読みつづける楽しさを感じております。なお、紹介がおくれましたが、上記は小林秀雄さんが新潮五十四年一月号に書かれた文章であります。

以上、述べて来ましたように、僕は大学生諸君と一諸に学問と人生と祖国のことを心ゆくまで語りたいたいと思っているものでありますし、そうした真しな大学生をぜひとも、この合宿教室にさそいたいと思っています。まったく、イデオロギー等の宣伝のために、このようなことをしているのではありません。まずもって、君らが、このような心配をされるのでしたら、僕自身の生き方を述べ

て明らかにしたいと思います。すなわち、私は、自分の一生を一つのイデオロギーにたくしたくないし、そのような生き方は、悲しいものだと思っております。

また、勧誘の方法も、MAN to MANで一人一人の学生にじっくり語りかけてゆくことを旨としております。そこでは、自分の名をなめることを第一に大切にしています。いたづらにマイクをつかったり、ピラをはったりする方法は僕自身がきらう方法であります。

こうした、僕自身のうったえかけが、千葉大学の自治会は外部団体の活動を大学内では禁止しているとの旨で反対されるのでしたら、もう一度、考えてもらえないでしょうか。まずもって、

Sentimental であるべき大学生の主体性は、あたたかく育てられなければならない。これが僕の第一の理由です。第二の理由は、大学の自治は、自由でかつ大切にされなければならない。それは、一社会人のうったえかけといえ、それをあたたかく認めてゆくことによって確立されると思っております。

以上の理由をもってしても、反対されるのでしたら、千葉大学の自治は、もはや失なわれていると言わざるをえません。

もっとも、諸君らが自治会幹部という名のもとで、一つの政治運動をもくろみ、その政治運動の目的がどうしても私及びこの合宿教室を認めるわけにいかないならば、そして君達のはっきりその旨を述べるのであるならば、ものわかれということで生涯の別れをしようではないか。もう一度

はっきり言うが、そんなものを僕は大学の自治会として認めない。

ずいぶん、きついことを述べたようですが、どうしても再思していただきたく書き上げました。できれば、会う前に、一文でも便りいただければ幸いです。

草々

⑭ 古川 修 宛

(昭和五十五年七月六日)

前略

近況報告です。六月二十九日(日)三島弘さんから依頼されていた東大生厨秀俊君に会いました。心よく会ってくれたものの、興味半分の感じで合宿参加までとはいきませんでした。なおもう一名、早大生横井君についても、やっと本日電話がつながりましたが、まったくその気なくだめです。

それから、千葉大学についてですが、すでに便りをかいた四名のうち、二名について会うことができました。なお、一名については、便りが帰って来てしまい、少々がっかりしています。会ったのは、斉藤君と今場君です。斉藤君とは、大学食堂にて会いました。彼とは、昨年十月からのことになりましたが、話していても、うつむくままで元気なく、バイト等で参加できないとのことでした。君の選んだことであり、君自身の人生だから、それならば、よかろうということではわかれませんでした。昨日五日(土)のことです。

今場君については、本日下宿をたずね、会って来ましたが、参加とまではいきませんでした。少

々楽しみな人物ですので、今後とも、なにかと話しかけてゆこうと思っています。来年まで大切にしたい人物です。

なによりがっかりしたのは、便りの返って来た佐藤君です。教育学部四年の人で、手ごたえはあったのですが、まさか住所が正しくないとは情けないです。今場君の話によれば、教育学部の四年生は、試験をひかえ、とりわけ僕らのような団体活動に対してデリケートになるんだとのこと、一応もつともな話ですが、教師をめざす人が、自分の名と住所もはっきりしないとは、男子として情けないです。

それから自治会のメンバーとは、その後会えず、本日再び便り書きました。それほど、ふかいりはしないつもりです。ただ、便りをかいて来るようでしたら、それなりに答えたいと思っています。以上のようなわけで、今だ一名もさそえずにいます。つくづく、天下は大物だなと思う次第であります。姿勢をかえずに、千葉大学にまた行こうと思っています。

草々

追
悼
歌

社団法人国民文化研究会理事長 小田村 寅二郎

故島崎祐司君のみ霊のみ前に

などてかく疾く逝きましましきすばらしき才とみ心持ちたまひしに
悲しとも言はむすべなし為すありし前途はるけき君にしあるに
遺されしみ親はらから悲しみにむせびたまひしみ心はいかに
今日よりはみ魂安けく在しませとたゞに祈るも友らと共に

(昭和五十九年二月十三日)

社団法人国民文化研究会副理事長 小 柳 陽太郎
九州造形短大教授

島崎君の御霊前に

正大寮に語りし折の清らかなの君がまなざし忘らえなくに
清らかな君が目もとのしるけきを偲びまつれど今はすべなし
あひまつるすべはあらねどみ友らの心にまさむ君が思ひは

(昭和五十九年四月二十五日)

社団法人国民文化研究会常務理事
開発電子技術株式会社取締役
長内俊平

ひとつよはひとつよなりとおもひつゝなほ惜しまるゝ若き友の死

(昭和五十九年四月二十五日)

合宿教室にて

社団法人国民文化研究会監事
株式会社ファミリー常務取締役
松吉基順

「よきみ歌よ」と声かけし折の嬉しげな君の笑まひの今もうつつに

(昭和五十九年四月二十六日)

皿田兄より訃報のありて

鳥海信用金庫仁賀保支店
須田清文

真夜中に電話なりけり九州ゆ友かけよこそ何事かある
君の声いつと異なり何事と思ひてきけば悲しきしらせ

君の声に君の悲しみつたはりて心うごけどせんすべもなし
島崎さんの悲しきしらせ聞きたれど再びあへるこちするかも
九州の大合宿に集ひゆけば再びあへるこちするかも
東京に集ひてゆけば皆と共にまた語りあへるこちするかも
いかならむ事や起りぬうつし世は動きてやまずはかるすべなし

(昭和五十九年五月七日)

東急建設株式会社 奥 富 修 一

本年二月事故にて亡くなりし島崎君のことを

再びは見ゆることのなき友を窓辺によりて偲ぶひととき
君は今いづくにゐますか合宿に共に参ずる約束せしに
大学にひとり乗り込み勧誘の戦ひつづけし君にてありしに
広ごれる緑の国原眺むるも君の姿をえ見ぬ悲しさ

(昭和五十九年八月 第二十九回阿蘇合宿にて)

亡き島崎祐司さんを偲ばれた奥富修一さんの歌にふれて

この春に亡くなりたまひし後輩のこと合宿中も偲びたまふか
この阿蘇に集はんと約せし後輩を詠まれし歌の悲しきろかも

社団法人国民文化研究会主催慰霊祭献詠歌（昭和五十九年九月二十二日於東京大神宮）

令兄 島崎 忠

三十路にてこの世を去った弟よこの悲しみ苦しみは月日の経つのを待つばかり
幼き時の楽しかった思ひ出はいつまでたっても心に残るなり

社団法人国民文化研究会理事長 小田村 寅二郎

四柱を新たにまつり畏みてみ霊のふゆをこひのみまつる

ごしかるわれらがゆくてに尊かるみちびきたまへとただに祈るも
亡き師友のうつしゑの前に集ひ寄りみたまをろがむ今日のわれらは

日産自動車株式会社法規部 古川 修

この春に黄泉の国へと旅立ちし友のみ霊よ安らかにませ

神奈川県立湘南高校教諭 山内 健生

島崎祐司兄を憶ふ

定例の研究会で二度三度と発表かさねし直ぐなる君よ
われらみな正大寮に集ひより語りあかせし日々のなつかし
逝きませし君が御霊ををろがみつつ友らと語らふこの夕べかも

東急建設株式会社 奥 富 修 一

在りし日の写しゑ見ればはにかみをたたへし君の面輪恋ほしも

。

年月のはよ過ぎゆけと語りたまふ兄君さまの胸内はいかに
みたままつりにささげたまへる兄君の歌をし誦めば胸熱くして

(御令兄 島崎忠様の献詠歌を拝して)

島崎祐司兄を偲びて

告別の日より七月過ぎたれど未だ思へず君逝きしとは
さはやかな笑み浮べつつ語りたる君がおもかげうつつに浮びく
今日にでも会へるがごとき心地して君のおもかげ想ふかなしさ
納得のいかぬことあらば懸命に食ひ下りたる熱き君はも
人知れず悩み苦しみ逝きたまひし君を思へば胸のつまるも

海上自衛隊 鏖 信 弘

島崎祐司兄を偲びて

会社より一人選ばれ研究に努められたまひし君の惜しまる
仕事の悩みを語りし吾を励ましくれたる君よ今もうつつに
己がことのみ君に語りかくまで悩みられたまひしとは気づかざりけり

横浜防衛施設局事業部 山根 清

島崎祐司さんの御魂に

胸ぬちを知りもせずして過しける己が愚かさくやまれてならず
訃報をばうけしその夜は静々と小雪散りをり悲しかりけり

株式会社 創芸 布 瀬 千代子

島崎祐司先輩をお偲びして

若くして逝きにし先輩の御霊をばをろがみまつる日は近づきぬ
外国の兄にかはりて亡き先輩のみたまなごめの席につらなる

株式会社千代田コンサルタント常務取締役 上 村 和 男

島崎祐司兄を偲びて

小夜ふけて虫の音しげくなりければ亡き友ひたに思ひいでらる

日産自動車株式会社 内海勝彦

島崎祐司兄のみ霊に

師の君の古希の祝ひに思はずもまみえしことを喜びあひしに
久々に会ひえて種々語りしがつひの別れとは思ひもかけず
穏やかにゑみを浮べて話さるる君の面影今もしるけき

建設省建築研究所 大岡弘

自らの家庭ももたずに君去りぬあまりにも早くかけぬけし君

防衛施設庁 皿田宏

大洗の大学寮にて子規研究を発表されし先輩の思ひ出さるる
学生時代山を愛され登頂のうつしゑ見せて下されし先輩
青春のかけへのなき日を共に過せし先輩の死悔まれてならず

島崎君の便りを読みて

四年前君がのこせし御便りの言の葉つよく迫りくるかな
千葉大に単身のりこみ勧誘をつづけし君の心根しのぼる
ひとすぢの思ひをぶつけて生きて来し君の便りに応へてゆかむ

交通公社トラベラント興業株式会社 松 藤 力

昭和五十年春合宿終了後に島崎君達、故郷柳川を訪ねてくれし事を

久留米での合宿終えて柳川へ友らと共に君は来ませり

柳川へ着くやすぐさま泊り場へ船乗りせむと君は急ぎぬ

船を降りて訪ねてくれしわが家にて過せし夕飼のたのしきひととき

酒飲みて語らふ姿忘れえぬと母は言ひけり君をしのびて

島崎兄の御霊前にて

住友電工株式会社
布 瀬 雅 義

君逝きて十月余りの今もなほ泣かぬ日はなしとふ君が御母は
なぐさめの言葉もしらず涙こらへ肩をふるはず君が御母に
兄上の二人の子らはすこやかに育ちゆきませ君にかはりて

略 歴

年 号	年 令	
昭和二八		七月二十五日、島崎保司と登喜子の長兄・長姉・次姉の末弟として東京・北区に生る。
三五	六	四月、北区立豊川小学校入学。
四一	十二	三月、同校卒業。
		四月、東京都北区立豊島中学校入学。
四四	十五	三月、同校卒業。
		四月、東京都立小石川高校入学。
四七	十八	三月、同校卒業。
		四月、東京工業大学工学部入学。
四八	二十	八月、第十八回学生青年合宿教室参加。以後東工大学内文化団体歴生会の会員として活躍。
五〇	二十一	三月、久留米春季幹部学生合宿参加。
五一	二十二	三月、東京工業大学工学部高分子工学科卒業。
		四月、東京工業大学理工学研究科化学工学修士課程就学
		四月、東京工業大学を卒業と同時に社団法人国民文化研究会に維持会員として入会。
	二十三	八月、第二十一回学生青年合宿教室、指揮班員として参加。

五三	二十四	三月、東京工業大学理工学研究科修士課程を終了。四月、丸善石油化学株式会社に入社、エチレンプラントに勤務。
五四	二十六	八月、第二十四回学生・青年合宿教室に国文研班々員として参加。
五五	二十七	六月～七月、合宿教室へ学生勧誘のため千葉大学へ単身乗り込み果敢なる勧誘活動を展開。 八月、第二十五回学生・青年合宿教室に班付として参加。 十一月、工業技術院化学技術研究所へ派遣さる。
五六	二十八	八月、第二十六回学生・青年合宿教室に指揮班員として参加。
五八	二十九	四月、丸善石油化学株式会社研究所に勤務。
五九	三十	六月、東京工業大学学内にて歴生会OBとして合宿勧誘に従事。 一月十五日、国文研理事長小田村寅二郎先生古希の祝賀会に参列。 二月十一日、逝去。戒名、賢清浄祐信士。菩提寺並墓所駒込西福寺。

あ　と　が　き

奥　富　修　一

吉田松陰の留魂録に言う「吾れ行年三十、一事成ることなくして死して禾稼（穀物）の未だ秀でず実らざるに似たれば惜しむべきに似たり。然れども義卿の身を以て云へば、是れ亦秀実の時なり、何ぞ必ずしも哀しまん」と。人寿とは定まりないものであり穀物が春夏秋冬の四時を経る如く、三十にて死す者は自らその三十年間に人生の四季を完結するのだ、と松陰は生涯をかけて体得した信念を吐露してゐる。

島崎君と縁あってお付き合ひ戴いたこの十年間はまさしく彼の二十歳から三十歳に至る青年時代そのものであった。今、遺稿集の編集を終へようとして静かに振り返ってみるとさまざまの思ひ出が浮んでくるが不思議とこの松陰の言葉が彼の人生をそのまま写し出してゐるような気がしてならない。中でも社会人としての生業の合間に単身千葉大学に乗り込んで合宿教室への学生勧誘を敢行されたことは彼の生命が最も燃焼してゐた時季ではなかつたかと思ふ。学生食堂で次々と学生に声をかけ、ある時は活動家達に取り囲まれたこともあつたといふ。東工大二年の二十歳の夏に初めて社団法人国民文化研究会主催の「学生・青年合宿教室」に参加した時に短歌と古典の世界のひろやかに感動し、「僕のまさしく第一歩」であると感想文に記した時より七年を経て彼は千葉大の学生に宛

た書簡の中で「縁あって東工大在籍中にこの合宿教室に参加する機会を得、以後今日まで多くの友に
はげまされながら学問と人生と祖国のことを考え続けている一人としてどうしても大学生諸君にこの
合宿教室のことを話しかけたいと思ひこうして立ち上った」とそのやむにやまれぬ胸中を述べたので
ある。

常に控え目でにこやかな微笑を絶やすことがなかった島崎君、自分に忠実な人からは友人に宛てた
書簡に特に良く表はれてゐる。書簡の文章はそのまま彼の純なる魂の表白であるに違いない。青山直
幸氏の追悼歌には彼の姿が端的に歌はれてゐる。

さはやかな笑み浮べつつ語りたる君がおもかげうつつに浮びく

最後に留魂録の一節を引用させて戴き島崎君の御魂に捧げると共に、後に残った私共の任ふべき責を
かみしめたい。

「若し同志の士其の微衷を憐み継紹の人あらば、乃ち後來の種子未だ絶えず、自ら禾稼の有年に恥
ぢざるなり。同志其れ是を考思せよ。」

末筆乍ら、本遺稿集出版に当って懇切子細に御指導下さいました小田村寅二郎先生、心よく題字の
御揮毫をいただきました長内俊平先生、株式会社精美堂の利根川専務をはじめとして多くの方々の並
々ならぬ御支援に衷心より御礼申し上げる次第です。

昭和五十九年十二月二十日

島崎祐司君遺文遺歌集

付・追悼歌

非売品

編集

島崎祐司君遺文遺歌集出版委員会

川越市宮下町一―十三―十九

奥 富 修 一 氣 付

発行

昭和六十年二月十一日

印刷

東京都文京区白山一―二十一―四

株式会社 精美堂



島崎祐司君(享年三十歲)遺文遺歌集

